

BSC のこだわり

演奏家のレベルが上がれば上がるほど 人の声に近いサウンドを求められる



加藤 朋海

1969年、千葉県生まれ。高校1年の時にトランペットと出会い、19歳でドイツへ単身渡欧。職人として工房で技術を磨く一方、楽器デザイナーとしても頭角を現わす。現在もドイツのニッテルに工房を構え、「楽器は舞台の上で開発するべき」を信念として、ジャズのみならず、クラシック、ポップスなど幅広いジャンルのプロと交流しながら、プレイヤー・サイドに立った楽器作りを行なっている。
<http://www.select-inter.com/>
<http://www.brasssoundcreation.org/>

プロ/アマチュア、ジャズ、クラシックを問わず、多くのプレイヤーから愛用されているトランペット・ブランドBSC (Brass Sound Creation)。このブランドを主宰しているのが、日本人クラフトマンの加藤朋海だ。高校卒業後、単身でドイツへ渡り楽器の製作に携わって来た彼が、現在目指しているサウンドはどのようなものなのか。BSCの最新モデル“ニューオリンズ”を手に来日した彼に、話を訊いた。

取材：峰崎芳樹 撮影：松川泰治

プレイヤーはいましたか？

加藤：メイナード・ファーガソンは好きでしたね。聴いていると力がみなぎるような、そのサウンドに惹かれていました。

—演奏家ではなく、楽器職人を志されたのはどういう理由だったのでしょうか？

加藤：僕の高校生の頃は、いわゆる“受験戦争”が激しかった時代でした。いい大学に入って、いい会社に就職して……という価値観が主流だったのですが、僕はサラリーマンになるのではなく、すべてのプロセスに一貫して責任を持てる仕事をしたいという気持ちが強かったため、職人への道を選びました。

—日本国内ですと一般的には国産のトランペットかアメリカ産のものが主流で、ドイツの楽器というのはなかなか入手しにくいのですが、それはやはり、職人がハンドメイドで1本1本作るスタイルを今も踏襲しているために大量生産ができない、という理由からなのでしょうか？

加藤：そうですね。昔ながらの職人氣質をもったスタイルの工場が多いのは事実です。僕自身も、侍の刀を作るような気持で作っています。だから、BSCのトランペットも、数を多く売るといよりは、良さを理解してくれる人に使ってもらいたいという気持ちがあります。様々なニーズに応えるという方向性もあるとは思いますが、僕の経験から言う

と、演奏家のレベルが上がれば上がるほど、楽器に対する要求というものは同じ方向に収斂していきますね。

—それは、具体的にどのような要求でしょうか？

加藤：一言で言うならば「声」でしょう。人の声に近いサウンドを求められます。金切り声のような声ではなく、オペラ歌手や黒人霊歌を歌うお母さんのような、温かみのあるサウンドですね。

—ドイツという国での演奏環境では、PAを通してではなく、生で演奏されることが多いように思いますが、そういう環境によって培われたドイツの楽器ならではのサウンドの特徴のようなものはありますか？

加藤：やはり、マイクのような音響設備に頼らず遠くまで届く音でなければなりませんから、独特なサウンドの傾向を持っていると思います。例えば、いわゆる「遠鳴りする」音で録音された音は、とても立体的で奥行きがある音でスピーカーから聴こえてきますが、そうでない音はとても平板な音になるといったようにね。

—2008年には、オバマ大統領就任のレセプションで、ウィントン・マーサリスがBSCのトランペットを吹いたことが日本でも大きな話題になりましたが、どういうきっかけで、彼はBSCを吹くことになったのでしょうか？

加藤：彼がシュツットガルトでコンサートを開

すべてのプロセスに責任の持てる仕事をしたかった

—まずは、加藤さんがトランペットを始めたきっかけを教えてください。

加藤：子供の頃に見た「ブルース・ブラザーズ」という映画がきっかけでした。それを観て、ホーン・セクションの音がカッコいいと思い、高校の管弦楽部でトランペットを始めたんです。

—その頃、特に好きだったトランペット・ブ

BSC とは……

日本人デザイナー、加藤朋海が主宰するトランペットブランド。19歳で渡欧した加藤は、同地で伝統に培われた技術に触れると同時に、現代の音響物理学の研究にも注力。職人として楽器製作に携わる一方で、楽器デザイナーとしても知名度を高めた。その後デザイナー業と並行して独自のコンセプトを具現化するため設立したのが、BSC (Brass Sound Creation) だ。

BSCトランペットは伝統的なハンドメイドの技法と、最新の音響物理学を融合させ、そこにプロ・ミュージ

シャンの意見をフィードバックさせて完成される。

TR-501G (WM)、TR-303S (シンフォニー)、TR-206S (オールラウンド)、TR-106S (ニューヨーク)、TR-105S (ミレニアム) の各モデルは、いずれも柔らかい音色と芯のある響きが特徴。

2008年にオバマ大統領の就任式典で、ウィントン・マーサリス (tp) がBSCのトランペットを演奏するなど、トップ・プロからも信頼されるクオリティで注目を集めている。



親交の深い加藤 (左) と、ウィントン・マーサリス (右)

くと聞いて、見に行きました。そこでたまたま彼と話をすることがあって、話すうちにBSCに興味を示してくれたんです。

——ウイントンから楽器に対する具体的な要求——例えばベルのサイズとか、ボア・サイズなどのテクニカルな要求はあったのですか？

加藤：彼からは何もありませんでした。僕自身のアイデアで、ウイントンならこんな感じの楽器を好むのではないか……というコンセプトで作ったのが、TR-501G（正確にはTR-501Gのプロト・タイプ。TR-501Gは現在マーカス・プリンタップが使っている）です。靴とか服の職人と一緒に、大体の基本になるスタイルというものはあるわけですから、そこから本人に合ったものを作るのが職人の腕の見せ所だと思うんです。それに、一流になればなるほど、支柱がどうか、ネジがどうか、そういう要求はしてこないものです。

——では、ウイントン仕様にするために加藤さんが工夫された点はどこでしょうか？

加藤：重視したのはサウンドですね。彼のサウンドの特徴は「長靴」みたいにブカブカした、とてもファットな音です。モニットの楽器もそうですが、楽器がパッと反応してくれない。敢えてそういう楽器を作りました。彼の演奏を聴くと分りますが、ウイントンのテクニックに楽器が反応しきれないタイムラグがある。彼はそういうサウンドが好きなのです。

重要なのは、音の中心に どれだけの精力が込められているか

——今回の来日の際にお持ちいただいたBSCの新製品、「ニューオリンズ」について聞かせてください。

加藤：これは「ニューオリンズ」という名前ですが、ニューオリンズ・ジャズを意識したというよりも、ニューオリンズという土地が生み出した黒人の歌、サウンドを意識して名付けた楽器です。太くて温かみのある音、金属的なエッジを一切取り除いた音がコンセプトです。そして、ヘヴィ・タイプの楽器が持つデメリットのひとつである、「操作上の重さ」を取り除くというのがポイントでした。「操作上の重さ」は楽器の重量そのものことではありません。音楽家ももっと自由にフレキシブルに演奏できるように、ということを目指したものです。

——BSCの楽器は、このモデルに限らず、すべてベルが2枚取りになっています。日本では1枚取りベルが主流ですが、あえて2枚取りにする理由は何でしょうか？

加藤：1枚取りというのは、1枚の真鍮板を円柱状にして、先端をベルの形に引き延ばす工法です。そうすると、どうしてもベルの

先端が、他の部分に比べて薄くなってしまう。例えばビッグバンドのリード・トランペットのようなサウンドを求めるのならば、こちらの方がニーズにマッチするでしょう。でも、例えばウイントンのようなソリストが要求するサウンドだと、1枚取りでは限界があるんです。2枚取りというのは、ベルの先端と他の部分を別々に作ってベルを完成させる方法ですが、見た目は1枚取りと同じに見えますが、ベルの先端とベルの他の部分で厚みが一定になるなど、工夫を凝らしています。

——音の太さで言うと、楽器のボア（内径）を太くすることで、音を太くすることが一時期はやりましたよね？

加藤：そうですね。でも僕は、それは安易な発想だと思います。ハリー・ジェームスやルイ・アームストロングが使っていた楽器は、現在のものよりはるかに細い内径でした。でも、録音を聴くととても太い音に聞こえますよね？ 実際は内径を大きくするだけでは、かえって音は薄くなってしまいます。ボアは、カタログなどにも必ず記載されていますけど、実は楽器の抵抗感や音の太さは、ボアの大きさだけで決まるわけではなく、設計のトータル・バランスが重要なのです。——楽器職人としての加藤さんが考える、理想のサウンドとは？

加藤：音の中心（センター）が、何よりも大切になると思います。音による表現は書道の筆の動きとまったく同じ、芸術だと思うんです。筆でもシャープ・ペンシルでもひとつの文字を書く場合、その走るラインには中心があり、書道の名手はその線の中心に全力の精神を投入します。その結果、余った「勢い」が、墨のしずくとなって文字の周辺に飛



BSCの最新作となる、TR-601（ニューオリンズ）。「太くて温かみのある音」をコンセプトに作られた、ヘヴィ・タイプのモデル。ベル材質：イエロー・ブラス特殊2枚取り
ベル直径：4.960"（126mm）
ボア・サイズ：0.460"（11.70mm）
仕上げ：ロー・ブラス（非メッキ）
付属：セミハード・ケース

び散るのです。これと同様、世界のトップ奏者が演奏のエネルギーを音の中心に送り込み、それを楽器が吸収できない「余剰」が、雑音＝バリバリと鳴る金属音となって横に広がってしまう。その横に広がっている雑音を「金管楽器の良さ」と誤解している人が多いように思います。

——なるほど。

加藤：吹奏楽やマーチング・バンドで、トロンボーンなどに「バリバリに鳴らして」というような指示を出しているのをみかけることがあります。本来の金管楽器はそういうサウンドではありません。そのことは、モーツァルトのレクイエムの「テューバ ミルム」を聴いてもらえば、1～2分ですべて理解できるでしょう（録音は、カール・ベーム指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団などをお勧めします）。その金属的なバリバリという音をできるだけ取り除くというのが、今回のニューオリンズというモデルのコンセプトです。僕は、「音の中心（センター）」にどれだけの精力が込められているかが重要だと考え、楽器を製作しています。一流プレイヤーになればなるほど、そういう方向に意識が集中していると僕は考えていますし、そういうプレイヤーにとってBSCは最良の楽器のひとつだと思っています。